

附属学校最新情報紹介

学校名	京都教育大学附属幼稚園		
役職	育友会会長	氏名	無量 智美
活動名	京教が生んだ巨匠・川尻潤先生にインタビュー		

京都教育大学附属幼稚園から附属桃山小学校、中学校、高校のOBであり、美術家、陶芸家そして教育者としてご活躍中の川尻潤先生にフィーチャーし、様々なお話をインタビュー形式でお伺いしました。

—川尻先生は幼稚園から高校までの15年を京教で過ごされました。どんな15年を経て芸術の道に進まれましたか？

(川) 幼稚園の頃はザ・人の顔色を見るタイプ。小学校時代は、自分でいうのもなんだけど、割と勉強熱心で。中学校ではサッカー部に所属し、部活に夢中になっていましたね。美術の道へ進むことを決意したのは高校1年の時だった。すんなり決めたわけではなく、先代の父に、「(芸術を) やってもしないのに嫌だと思ふのは、それは違うのではないか」と言われたことはきっかけになったが、元々自己顕示欲が強い人間で。決意してからは、ひたすら絵を描き続けた。やってみないとわからない、というのは、大人が言うことの中では紛れもない真実であるね(笑)。

Jun Kawa
Jiri

かわじり じゅん
1964年生まれ
美術家、陶芸家。
清水焼禎山窯窯元8世。京都工芸美術大学特任教授/工芸領域(陶芸)
京都教育大附属幼稚園、附属桃山小学校、中学校、高校卒業。東京藝術大学美術学部卒業。同大学院美術研究科デザイン専攻後期博士課程単位取得。著作「歪みを愛でる」ポラ出版。作品収蔵はスウェーデン王室、京都市美術館、大阪大学博物館、滋賀県陶芸の森美術館ほか。

—教育者、そして芸術家として。

(川) 自分で何かをつかみ取るため、僕自身はリスクな生き方をしてきたが、教育者として学生にそれを強いるつもりはないのです。芸術家は、既存の価値を転覆したり変化したり革命を起こしてきた人たちともいえる。その一方で、僕が教育者という立場で学生に接する時間というのは、とても新鮮。彼らはエネルギーが高く、新しい美意識を持っています。だからこそ、学生たちには、僕の価値観を押し付けないように、常に細心の注意を払っているよ。



本園の伝統である白いエプロンを着て幼稚園で過ごす先生。



—先生は6歳頃までの感性がその人のその先を支配するとおっしゃられましたが、脳科学や幼児教育の研究においても人間の脳の90%は6歳までに完成するといわれています。先生が幼少期に出会ったものの中で、先生の作風に影響を与えているものは？

(川)グリム童話『ヘンゼルとグレーテル』の絵本に出てくるおかしな家が、きらびやかで衝撃を受けましたね！柱を食べてみたらどんな味がするか考えるだけでワクワクしてね。—先生の大型作品にジャングルジムみたい！と子どもたちが一同に駆け寄ってきたそうですが。

(川) お年寄りから子どもまで、美術に詳しくない人にも楽しめる作品を作りたいという僕なりのサービス精神(笑)。作品は空間を明るくするファンクション。子どもたちにシンパシーを感じてもらえたと実感し、あの時は嬉しかった。

—作品を生み出すきっかけやタイミングは？

(川) リラックスしているときに思いつく。ロジカルに考えて作ろうとするとつまらないので。唐突にスケッチブックにデッサンし、それを具現化してさらに面白くなるという流れ。

—リラックス、ですね。

(川) それに子育てもリラックスです。親のリラックスは子どもに伝わるし、その逆も然り。どの関係の中でもリラックスって必要。

—おわりに—

川尻先生の作品は国内外の人々を魅了し続けており、現代美術のオブジェ作品として人々の生活と心を彩っています。ようやく、自己発信する時代の流れがやってきたのだから、誰もが表現者として挑戦し、クリティクス（批判者）に対して恐れる必要はない、と語る先生。そう語る先生の眼差しは、陶芸家として、土に触れる時のようにそっと優しく、ときに力強く、また教育者として受容の心を感じました。そして、川尻先生がまさに『先を生きる人』として、社会全体にそっと手を差し伸べてくださっていることが身に染みる、心温まるインタビューとなりました。近々、本園園児たちに、思う存分、土に触れる機会をプロデュースしてくださること。「母校だからね。」とはにかむ先生の笑顔の中に、京教への愛が溢れていました。



(写真上) 附属桃山小学校時代の先生。制帽につゆくさの校章が光る。



(写真右) 附属桃山中学校でサッカー部時代の先生。

